

私家版中国留学記

南 有 紀

はじめに

転機は突然やってきた。

某県の公務員として勤めてようやく一年にならんとしていた一九九四年三月下旬、春の日差しうらかなある日の午後。県の広報という、およそ大学時代の専攻とかけ離れた仕事を担当していた私は、その日もワープロをたたきながら原稿を清書していた。すると、突然上司が私のところにやってきて、こう言った。「あんた、中国に行かんかね？」……その日からおおよそ五カ月後、私は自分の体重ほどあるスーツケースに肩を抜きそうになりながら、中国四大古都のひとつであり、中華民国のかつての首都であり、また日本軍蛮行の地としても有名な南京に立っていたのである。

凡そ『お茶の水史学』に相応しくない内容かとは存じますが、とある一人の卒業生の現代中国よもやま体験記、とお見逃しくだされ

ば幸甚です。

チャンスの神様とぶつかって

私の中国行きの目的は、某県の中国語研修職員として大学に留学し、中国語をマスターする、というものだった。語学を学ぶなら北京に行くのが最適といわれているが、友好地域交流など諸々の理由により、留学先は南京大学に決定していた。

南京行きを言われたとき、まず最初に浮かんだのが「何故、よりよって南京？」という半ば喜び、半ば悲しみにも似た思いだった。喜びというのは、この都市が自分の卒論におけるテーマの、まさにその舞台であったこと。悲しみというのは、この都市の対日感情がよいものであるはずがない、という圧迫感から来るものであった。

時あたかも「南京大虐殺はでっちあげ」という某大臣の発言騒動も起こり、そんな時に日本人がこのこやっ来てたらパンチを一発く

らわしたくなるのが人情ではないのか……などと心は千々に乱れたものだった。

ところで私がこの中国語研修員に選ばれた理由だが、これが当時も今もよく分からない。決して上司から言われる前に自薦したとか、中国語ができると威張ったとかいうことはない。これは個人的推測ではないが、私の「大学で中国史を勉強した」という履歴から「中国語もできる」という強引な結論が引っ張り出されたのではないかと思われる。ちなみに、一九九四年三月時点で私の現代中国語レベルは「ニイハオ」「シェシェ」程度であった。

ともかく留学前の五カ月はあわてて中国語の勉強を始めたり、中国での生活を心配して落ち込んだり、帰国後まだ中国語が話せなかったら切腹しなきゃならないと悩んだり、と忙しい日々を送った。もっとも、そんな中でも南京留学の道を選んだことを後悔したことは一度もなかった。大学を卒業して、もう中国とは一生かかわりのない世界で生きて行くしかないんだ、ととうに諦めていた自分にとって、これは一生に二度とない大チャンスであることはあまりにも明らかだったからだ。誰かが言っていた。「チャンスの神様は前髪しかなく後ろ頭はつるつるだから、ぶつかっただけに捕まえなきゃいけないぞ」……蓋し名言、かもしれない。

南京という都市について・私考

「南京ってすっごく田舎だけど、がっかりしないでね」——南京に着いた翌日に知り合った、帰国間近の日本人留学生にこう言われ

ても、その時はピンと来なかった。確かに日本に比べては田舎と言わざるを得ない町ではあったが、しかし日本で想像していたものより数百倍マシだと、私はむしろ感動していたのだ（これもまあ失礼な話ではある）。シャンプーはどこでも売っているし、リンスはスカ所しかないとはいえ一応買うことはできる。ネスカフェのインスタントコーヒーも飲めるし、m&mのチョコレートも食べられた。ケンタッキーフライドチキンの店でカーネルサンダース氏と記念撮影もした。当初に過大な期待を抱いていなかった分、「おお！南京でエビアンが飲めるとは！」と毎日某かの感動に出会いながら日々を送ることができたのだ。初めて中国に行ったとき、空きっ腹をかかえて何も売っていない商店を食べ物を求めて徘徊したのが夢のような発展ぶりだった。しかし暮らし始めてしばらく経って、ようやくこの人の言わんとした（かもしれない）言葉の内に秘められた、本当の意味が分かってきた。

南京。江蘇省の省都である。もちろん北京や上海など超・超大都市には比ぶべくもないが、街は大きいし、人は多く、物も豊富。しかし、南京は奇妙に素朴なのだ。街の見た目や設備もさることながら、街の醸し出す雰囲気、とてもこの都市が中国指折りの経済発展を成し遂げている大省の省都とは思えないものだったのだ。婉曲に言えば、それは昔のままの中国の雰囲気、今に息づいているということにもなり、悪く言えば洗練されていない、あかぬけない街ということにもなる。街の規模を別にした「都会っばさ」から言わせてもらえば、南京は同じ省の一地方都市である蘇州にも及ばないように思えた。私は道を歩いているとき、よく乱暴運転の自転車に

追突されたが、南京ではその追突者に怒鳴られたことはあれ、謝られたことは一度たりともなかった。中国ってこんなもんだ、と思っていたので、南京以外の他都市で追突されたときその追突者に「ごめんなさい」と言われたときは本当に驚いた。そういう、都会の持つ「余裕」が、南京には感じられなかったのだ。(あくまで私の主観でしかないのだが)

しかし私はそんな南京が大好きだった。私に「がっかりしないで」と言ったあの人も、きっとそんな南京が大好きだったんだと思う。私が一年の留学を終えて日本に帰る時には、南京に来たときにはなかった高層ビルがいくつも完成し(よくよく考えてみるとちょっと恐ろしい)、リンスも街の普通の商店で買えるようになっていた。そして、学生寮の周辺では、数カ月後に開催される全国規模の体育大会に備えるため、所狭しとひしめき合う古い家を取り壊して道幅を広げていた。次に来るときは南京も上海のような普通の都会になっているのかな、と多少の寂しさを感じずにはいられなかった。しかし帰国後三カ月ほどして南京に出張した際、その改修された道を見て仰天した。道が全く舗装されていないのだ。すさまじい土埃を巻き上げながらでこぼこ道を車や人が無秩序に行き交っている。その状況は以前と同じか、むしろ時代を逆行したような、大混乱きわまりない状況だった。なんでも、体育大会の期間中はきっちりレンガ(?)を敷き詰めてきれいにしていたが、これが終わると同時にレンガを剥がしてどこかへ持ってしまったというのだ。さすがは中国ならではの海戦術!大爆笑させていたたくと同時に、これでこそ南京だ、と嬉しくなった。いつまでもこの良さを持ち続

けてほしいというのは、部外者のエゴであろうか。(注……一九九六年六月に再びこの道路を通った時には、見事に美しくかつ立派に改修されておりました。念のため)

極普通留学生的日常生活

中国での私の住居は留学生専用の寮だった。しかしとても寮には見えない、二〇階建ての一見近代的ビルで、後に中国出張の際、車窓からこのビルを見た上司は「すごい立派な所じゃないか!」と感嘆の声を上げていた。確かに見た目はなかなか立派ではあるが、その中では幾多の波乱万丈のドラマがあった……。

以前、南京大学の留学生寮は中国人学生寮のすぐ近くの、こじんまりとした建物だったそうだ。しかし、留学生数の増加に対応して学校敷地の北の外れ、元の場所から歩いて二〇分も離れたところに新しい外国人留学生寮が建設された。正確に言えば留学生寮ではなく、一般の中国人旅行者のホテルも兼ねたビルだった。我々が授業を受ける教室や食堂の他、一般用のレストランもあり、よく中国人の結婚披露宴が行われていた。大学が商売に走るなんて、さすがは改革開放政策の賜物だと感心したものだ。中国人学生寮から隔離された場所に建設されたのは、これは決して偶然ではないと思う。実際、南京大学の中国人学生がこの外国人留学生寮に入るときは訪問目的や相手の名、予定時間のチェックはおろか、身分証明書を受付に預けなければならなかった。外国人である我々が彼らの寮に入るといふことは原則的にできなかった(もともと私はとても外国人とは思

えない容貌及び服装をしているため、入り口で止められたことは一度しかない。しかし、この検閲は実に嫌な感じがした。中国での生活はとても愉快だったし、物を買おうとしても店員が売ってくれない、書類の申請に行くと仕事を増やすと怒られる、等の社会主義のいわば悪しき弊害にぶち当たったとしても、それはそれで貴重な経験として楽しいものだった。しかし、外国人と中国人の交流を阻むようなあの雰囲気には、ここが他国とは根本的に異なる制度の国なのだと、いうことを痛感させられた。

ともあれ私の部屋はその留学生ビルの一八階にあった。シャワー・トイレ完備、二四時間給湯、冷暖房完備とのふれこみだが、実際は誇大広告極まりない、ジャロに訴えてやりたいような部屋であった。とは言えこれも私が日本で想像していたものよりはるかにマシなものだった。シャワーにはヘッドがついておらず、二メートル上方の蛇口からお湯が垂落下してくる代物だったが、慣れれば却って滝に打たれるような衝撃が気持ち良かった。お湯は二四時間給湯どころか毎日何時に出るかも覚束無い状況では、入浴は「お湯が出るとき」かつ「極めて短時間で」がキーワード。いつお湯が水に変わるかもしれないというスリルとサスペンスを味わいながら頭を洗う、というのは日本ではちよつとやさそつとではできない経験だった。暖房は全館共通、つまり自分でコントロールできないシステムだったため、どんなに寒くても暖房が入らないという悲しい日もあった。かじかむ手を電球で暖め、白熱灯は暖かいのに蛍光灯ではどうして暖まらないのだらう、と実に見みちくも貴重な教訓も得たものだ。しかし何と言っても一番閉口したのがエレベーター。住んで

いたのが一八階のため利用せざるを得なかったのだが、これが実によく壊れる。ドアが半開きになったまま動かなくなるのはご愛嬌。目的階についた途端に電源が切れ、外にいた人間と力を合わせてドアをこじ開ける、途中階でいきなり動かなくなり「助けて！」と壁を叩いて外へ救助を求める等。一番怖かったのは夜中にエレベーターに乗ったとき、いきなり「ガン！」という音とともにエレベーターがガクンと傾いたときだった。真夜中だったため、だれも気付いてくれなかったらどうしようという恐怖でパニック寸前。五分後に救出されたが、あのとときの怖さだけはもう二度とごめんである。ちなみに、私はエレベーターのトラブルに巻き込まれる回数が飛び抜けて多く、よく友人に「あんたとはエレベーターに乗りたくない」「エレベーターに呪われた女」と言われたものだった。

大学では、中国語のほか歴史、文化、社会学、果ては民間芸術や書道を学んだ。中国語の授業だけでかなり手一杯で、実際のところこれらの専門科目は先生が何を言っているのかちんぷんかんぷんだったが、一度は宮仕えした身が再び大学で勉強できるということが嬉しくて、ついつい多くの授業に首を突っ込んでいた。面白かったのが歴史の時間。内容はあくまでなにも知らない留学生が対象というところで基本的なものが中心で、日本で言うなら高校の教科書レベルだったが、とにかく先生の中国語を聞くのが楽しかった。秦の始皇帝は中国語で「チンシーホアン(秦始皇)」と言う。陳勝は予想に違わず「指導中国最初農民起義的民族英雄」と書いてある。劉邦は「リウバン」、項羽は「シャンユイ」……劉邦はいいけどなんだか項羽は感じがでてないな、と勝手に考えたり。ともかく中国語で

習った中国の歴史は、私にとってはなかなかのカルチャーショックであり、また楽しいものであった。

ところで、よく「一年間外国に住めば、自然に外国語が話せる」という希望的観測が取り沙汰されているが、勿論現実はその甘くない。言葉なんて使わなければ使わなくてなんともかなるもので、大学に二年間留学してほとんど中国語が話せない留学生もいた。昨今中国の主要大学には日本人留学生も多く、日本語だけで生活することは難しくもなんともないとのことである。上達するには努力しかない、というのは世界のどの国の言語を学ぶ際にも共通する大原則だろう。中国語に関して付け加えるならば、この言語は同じ「漢字」を使うだけに日本人にとって取っ付きやすい分、却ってチが悪い。時間が経てば経つほど深みに落ち込んで行く感がある、実に因果な言語である。私は今でも大学時代に中国語をまともに勉強しなかったことをとても後悔している。

大学の授業は午前に二コマ、午後に一コマ（週一日だけ二コマ）。私の所属したクラスは科目の自由選択制を採っていたので、かなり好き勝手な日程を作ることができた。朝八時から夜七時までずっと授業という地獄のような曜日がある一方、金曜日の授業を取らず週休三日制にするという、今の私にとってはまさに夢のような優雅な日々だった。休日には町に探検に行ったり、郊外へ足を伸ばしたり、先生や友達の家へ遊びに行ったり、水墨画を教えてもらったり……。これを天国と言わずして何と言おうか。こういう生活にたるみ切った一年後、日本に戻って再びOL生活を始めたときは、そのあまりのギャップの大きさに「登社拒否症の人の気持ちも分からない

でもないな」と感じたものだ。

中国は日常生活そのものからして何が起こるか分からないびっくり箱だった。道を歩けば自転車に追突され、バスに乗れば足を踏まれ、買い物をするれば商品もお釣りも投げ返される、路地に入ればいきなりおばさんが体を洗っている、等。最初は戸惑ったり、腹が立つこともあったけれど、次第に私自身も中国人に負けない行動力と精神力を身につけたためか、中国をサバイバルするその行為そのものがたまたま楽しくなっていた。もともと見た目にも中国人に近い私が、行動パターンも中国人化すると無敵である。怒鳴られたら怒鳴り返し（もつとも中国語は語気が強い言語なので、話し合いに熱が入ると怒鳴り合いに成らざるを得ない）、自分が悪くない場面では絶対に譲らない。隙を見せず、他人の隙にはちゃっかり乗じる。こういう中国の弱肉強食のところは、結構私の性格に合っていたに違いないと思う。しかし、どうやら私は中国になじみすぎてしまったようで、帰国して関西空港駅から郷里へ帰るためJRの切符を買おうとしたとき、私は無意識に中国サバイバルに不可欠のテクニク「順番抜き」を使ってしまった。周囲の冷たい視線を感じ、心から反省するとともに、これからの社会生活の中で中国時代の癖が出てしまったらどうしよう……とそら恐ろしくなった。もつとも、順番を並んでいるにしても間をつめず油断しきっているような人は順番抜きさされて当たり前だ、と私は今でも思っている。さすがに実行に移さない日本人の常識は持っているが。

ここで南京における中国・日本及び世界のニュース入手状況について少々ご紹介する。北京や上海のような大都会と違い、南京では

日本の新聞を売っていなかったので、留学生にとって一番早く、かつ確実な情報入手手段は実家に電話することだった。もうひとつあったのがNHKの国際放送「ラジオジャパン」だが、電波が極めて弱かったため、凄まじい雑音の中からかすかな日本語を聞き取るという非常に強固な忍耐力のある人しか聞いていなかった。もちろん中国国内のマスコミが我々にとって最大の情報媒体だったが、よく知られている通り、中国国内で報道されているニュースには制限がある。良いことだけを報じ、良くないことは人民に知らせないという思し召しによるものだ。以前よりはかなり改善されたという話だが、やはり報道管制は徹底しているというのが私の抱いた感想である。例えば、ダライラマが中国政府に先駆けてパンチェンラマ後継少年を認定した事件。中国での報道は「ダライラマがまたもや中国分裂の悪巧みを図っているが、中国人民はこれに対して全く動揺しない。分裂主義者に反対しよう」といったもので、ダライラマが中国政府を怒らせたということは分かるが具体的に何をしたのかさっぱり分からず、数週間後日本から送られてきた新聞を読んでようやく事の顛末が分かった、という具合である。同類のものとして台湾総統の訪米、地下核実験、アジア大会での中国選手ドーピング問題などがあつた。報道されていない訳ではないので、確かに以前よりは改善されているのかもしれない。

しかしここで驚いたのが、その情報管理に決して負けていない、一般庶民のたくましさだった。一九九四年秋に天安門近くで解放军将校による銃の乱射事件が起きたが、この事件を最初に私に教えてくれたのは一般の中国人だった。事件から四〜五日たった頃には、

回りのほとんどの中国人はこの事件の顛末をかなり知っていた。国内では全く報道されていないのに、である。友人や親戚に聞いたことだったが、その口コミネットワークには敬服するしかない。また、ある中国人は私に中国におけるニュースの読み方を教えてくれた。「汚職追放運動が効果を上げている」という報道がされているのは、汚職問題が相当深刻な証拠。「辺境の開発のために命を捧げた共産党幹部を讃える」キャンペーンは、つまりはそんな人間がめつたにいないという証明。所謂行間を読む、というこの読み取り方は言うなれば自明のことなのだが、私は一般の中国人がしたたかな見方を採っていることと、私という外国人にそれを教えてくれたことに対して、本当に驚いた。情報入手以外の方面でも、中国人民のしたたかさ、たくましさを痛感させられる場面に時々遭遇したが、まさにかの有名な「上に政策有れば、下に対策有り」の言葉通りだった。中国人民は、決して法律に違反はしないが、法律や時の指導者の思惑を超えてしぶとく、したたかに行動しているのだ。こうでなくては、この国を生き抜くことはできないのかもしれない。それにしても、このたくましくもしたたかな人民をまとめて一つの国家を維持していくというのは並大抵のことではない。中国共産党は本当にすごい！というのが偽らざる私の感想である。

日本で注目を浴びている中国のニュースといえば、なんといつても鄧小平のXデーに止めをさすだろう。ある日、友人と部屋で雑談しているときに、中央電視台の定時ニュースの時間になったのでテレビのスイッチをつけた。しかし画面はいつもと全く異なる静止画面で、葬送行進曲のような暗い音楽がただ流れていた。これはひょ

つとしてひよっとするとかのお方の……！鳥肌が立ち、足の先から頭の天辺まで痺れ、指も動かさない「お地藏さん」状態にあること数十秒。果たして喪服を着たアナウンサーが登場し、読み上げたのは……別の共産党老幹部の訃報だった。思わず友人と顔を見合わせてその場にへろへろとへたりこんでしまった。「日本に帰れなくなるかと思った」とはこの友人の弁。鄧小平の死で中国がどうなるかは、国内外でも楽観と悲観の両極端に分かれているが、楽観論を採っている私にとってさえ、彼が死んだと思つたときの衝撃は筆舌に尽くし難いものがあった。そう遠くない将来必ずやって来るXデーを、中国は、中国の一二億の民はどう迎えるのか。その日を中国で迎えることはついに叶わなかった私だが、ほっとした気持ちがある一方、歴史的瞬間に立ち会えなかったことを、不謹慎ではあるが、ちよつと残念に感じている部分があるのも事実である。余談だが、

私の知り合いに天安門事件の生き証人である日本人がいる。一九八九年春から北京が火山のようにエネルギーを噴き出し、街を飲み込むも、終には押し潰される全過程を全てその目で見たそうだ。なんて貴重な歴史的体験！羨ましくてたまらないが、何でも事件前後二週間ほどは北京の街の機能が本当にストップしてしまい、食べるものにもこと欠いたそうだ。やることはないし、暇だし、暗いし、ひもじいし、歴史的体験も何もあつたものではなかつた、とはその人の述懐。それでも羨ましい、と思つてしまうのは私の歴史をかじつた人間としての好奇心からであろうか……とまとめたいところだが、単なるやじ馬根性といった方が正確だろう。ちなみにその人は政府の出した特別機で帰国し、天安門のデモや解放軍制圧場面を激写し

たフィルムを空港で待ちうけていたマスコミに十数万円で売り払つたという後日談を持っている。

一九九五年の日本を席卷した一連の「オウム」事件も私が南京にいたときに起こつた。我々が入手した地下鉄サリン事件の第一報は、ラジオジャパンを聞いていたH氏がもたらしたものだ。いわく、「日比谷駅で人が沢山倒れた」と。我々は将棋倒し事故でも起こつたのかと話し合い、まさかあんな大事件が発生したとは夢にも思つていなかった。オウム事件は南京でも話題の的で、日本から送つてもらつた数週間遅れの週刊誌や新聞が留学生の間でひっぱりだこで回覧されていた。オウムの事件に限らず、日本及び世界のニュースに対して、我々留学生は共通して「もつと知りたいけど伝わつてこない」という、いわば情報に対する飢餓状態にあつた。いかなる時でも、どんな場所でも情報が簡単に手に入る日本では、ついぞ抱いたことのない苛立ちであり、もどかしさだつた。ところで、オウム事件の情報に関しては、私は史学科同期にして現在も大学院博士課程に在籍する野田有紀子女史のこまめな情報提供のおかげをもって、全く不自由せず、南京におけるオウムウオッチャーの名をほしいままにした。彼女は週刊誌や新聞記事は勿論のこと、オウムが弁明のために撒いたビラや発行紙、果ては洋服の青山が出した「うちとオウムは関係ない」という新聞広告の切り抜きまでわざわざ航空便で送つてきてくれた。野田女史の名は南京大学日本人留学生の間ですっかり有名になり、皆はしばしば「野田さんから新しいオウムネタ入ってない？」と聞いてきたものだ。飢餓状態の留学生に、情報という貴重かつ美味しい栄養を運ぶ親鳥の役目を果たしてくれた野田

女史に対して、ここに改めて感謝の意を申し上げる。

南京歴史散歩

南京は重慶、武漢と並び称される中国で最も暑い都市（「中国三大かまど」という）である。気温からいえばこの三都市よりはるかに暑い都市は決して少なくないが、高温と高気温を兼ね備えるのはこの三都市にとどめを刺すらしい。確かに南京の夏は暑かった。気温は三七〜八度程度で大騒ぎしすぎる程のことはないが、湿度が洒落にならない位高かった。流れ落ちる汗が蒸発せず、まさに滝のように体をつたい、靴に溜まっていくのだ。気温四八度のシルクロードでもへっちゃらだった私だが、南京の夏はボディーブローのように効き、実に生まれて初めての夏バテを経験してしまった。

そんな南京の夏の唯一の救いは、街道沿いに広がるプラタナスの木陰だった。孫文の遺体が北京から南京に移送され、大葬儀が挙行される際に植えられたものだという。「国民党が南京に残した最大の遺産はプラタナスだ」という言葉を南京の人に教えてもらった。実際のところ、もしプラタナスがなかったら強烈な太陽光線が直に道に照りつけ、気温は更に上昇し、南京は「中国最熱かまど」になっていたかもしれない。この点だけでも、私は孫文の遺体をわざわざ南京にもって来た蔣介石に感謝する。ところで、現地の人々はプラタナスを「フランス梧桐」とも呼んでいた。フランスから来た樹木だというのが、実はこれは正しくない。もともと中国の雲南省に自生していたこの木をフランス人が上海のフランス租界に移植し、

そこから南京にやってきたのだ。ものの名前ひとつ取ってみても、この国が近代に負った傷が見えるような気がする。

南京最大の歴史的名所は孫文の陵墓・中山陵であるとされており、私も四回ほどここを訪れている。しかし、正直に言っておくのは「階段の登り下りがきつかった」という印象しか残っていない。これは多分、私が孫文および中国近現代史について大学受験に必要な程度の知識及び興味しか持ち得ていなかったからであろう。南京が孫文ゆかりの地であることは有名なことなのだから、やはり留学前に少しでも本を読むなりして最低限の予備知識をつけて行くべきだった、と現在は後悔している。孫中山先生といえば、一九九五年秋に南京市で真ん中に彼の仮の像が建った。仮の、というのは実はこの銅像、一九九六年の孫中山生誕一三〇年（なんて中途半端な）を記念して作られる予定だったが、先に触れた九五年秋に南京で開催された体育大会にも間に合わせようということで、急ごしらえの仮の像を市の繁華街に建てたのだ。本物の立派な銅像はやはり九六年に完成すること。中国ってこういう二度手間は全く気にしない様で、本当におもしろい（注……一九九六年八月現在、「二代目」の仮像が建っている。本像の完成は十一月とのこと。二代目の仮像を建てる暇があればさっさと本像を建てれば良いのに、と思うのは決して私だけではあるまい）。

南京には中山陵以外にも、多くの史跡がある。有名どころでは私も行くのを楽しみにしていた孫権陵および朱元璋陵、そして南京城壁、三国期の石頭城など。郊外には六朝の石碑や石刻、陵墓がごろごろあり、近郊の揚州、鎮江にまで足を伸ばすと京杭大運河や甘露

寺などこれまた古代史専攻者にはたまらないモノ揃いで、自分の幸運に笑いが止まらない思いだった。ところで、朱元璋という御仁は以前から私にとって大変興味深い人物であった。実際にお近づきになるのは絶対に遠慮したい人だが、彼の墓・孝陵を見に行くことを日本にいたる間から私は楽しみにしていた。北京にいたる十三人の子孫の陵から一人遠く離れて南京に眠る朱元璋。孝陵という名と相俟ってなんとも物悲しく、かつ張り詰めた感じがするのではないかと勝手に想像をふくらませていたが、これが実際に行ってみると大違い。中山陵と並んで南京の観光ポイントとなっている孝陵には、毎日中国各地からたくさんのお客が押し寄せており、およそ「孤独」とか「物悲しい」とか「緊張」という単語とは無縁の世界が展開されていた。平日でも人が多いのに加えて、北京の十三陵ほど管理が厳しくなく、神道に並ぶ文官、武官、珍獣奇獣の像に触れても咎める人がいないためか、みんな全く遠慮せず貴重であるはずの像に触りまくっていた。ただ触るだけではない。肩を組んで写真を撮るのはおろか、蹴りを入れるやら駱駝の像の上にまたがってポーズをとるやらの大騒ぎで、そのほのぼのとした光景は、あたかもマクドナルド北京王府井店前でドナルド像と一緒に記念撮影する親子連れを彷彿とさせていた。朱元璋の陵は、彼のイメージと思いい切り正反対ではあったが、彼の墓もまた生前のご本人と同様「奥が深い」ものだという事なのかもしれない。

南京周辺で最も印象に残っているのは南唐二陵である。もともと、この王朝に対しては、確か亡国の当主が陳の後主と同様にかなり出来る詩人だったはず、という程度のあいまいな知識しか持っていない

かったが、この王朝の皇帝陵が「江南最大の地下宮殿」とであることを中国人の先生に聞き、北京の定陵をついに連想した私は留学生仲間とともにかの地へ出掛けたのだ。南京中心部からバスでおよそ一時間半、見渡す限り菜の花が咲き乱れる農村地帯のただ中にその陵はあった。一応史跡として保存されてはいるようだが、観光客はおろかめつたに見学する人すら来ないらしく、管理人は奥にひっこんだままなかなか出てこなかった。出て来るのがもう少し遅ければ我々は柵を乗り越えて侵入していたであろう。南唐は三代で宋に滅ぼされてしまったので、陵は先主と中主の二人の分しかない。正直なところ、地下宮殿と言ってしまうには相当無理がある、小さな小さな陵だった。陵のまわりには柵らしきものが巡らされていたが、もし柵がなければ普通の小高い丘と勘違いしかねないほど、陵は周囲の農村風景に同化していた。この陵は、私がそれまでに訪れた、いかに皇帝の御陵的雰囲気を持つ陵とは全く異質のものだった。孝陵をはじめ北京の十三陵、西安の始皇帝陵、乾陵、茂陵などがその皇帝の御陵としての荘厳かつ巨大な存在感ゆえに辺りを圧倒し、それ自体が特別な「風景」になってしまっている。とすれば、この南唐二陵の場合、陵が周囲の自然に溶け込み、一つの「風景」を作り出しているのだ。それはある意味で迫力を欠いているといえるし、より自然な存在だともいえる。勿論規模や背景が違うこの二タイプの陵を単純比較はできないし、どちらが優れていると主張する気も全くない。しかし、中国で最も感動した場所が「霍去病墓から見た陵墓群」である私にとっても、この静かな（中国において「静か」というのはそれ自体が財産なのだ）、見る者に穏やかな感じさえ与え

る陵は、霍去病墓とはまた別の種類の感動を与えてくれた。菜の花の鮮やかな黄金色の中に静かにたたずむこの陵の姿を、私は生涯忘れることはないだろう。ところで、南唐の後主李煜も陳の後主陳叔宝もともに亡国の君主にして、後世に名を残した詩人。しかも同じ南京を都とした君主である。奇妙な偶然と言ってしまえばそれまでだが、次に卒論を書くとしたら、ぜひここら辺りを探求してみたいものである（じ、冗談です）。

楚漢春秋

酒酣にして、高祖筑を撃ち、自ら歌詞を為りて曰く、

大風起こりて雲飛揚す

威は海内に加わりて故郷に帰る

安にか猛士を得て四方を守らしめん

と。児をして皆これに和せ習わしむ。高祖乃ち起ちて舞い、慷慨傷懷し、泣數行下る。沛の父兄に謂いて曰く、

游子故郷を悲しむ。吾は関中に都すと雖も、万歳の後吾が

魂魄は猶お沛を樂思せん。

彼の魂が焦がれ続けるといふその沛の地で、彼がこの歌を謳った跡に建てられたという亭の前で、彼が上機嫌で杯を掲げる巨大銅像を、私はただ見上げるしかなかった。

前漢の高祖、劉邦。彼と楚の霸王・項羽との戦い、そしてこの二つの巨星をめぐる数々の故事は古来より人口に膾炙している。項羽

と劉邦の楚漢抗争、そしてご存じ三国志、そのどちらが欠けたとしても、私はおそらく歴史を学ぶ道を歩まなかっただろう。江蘇省最北部、徐州市から車でおよそ一時間半の片田舎こそ「沛」すなわち劉邦の故郷である。

私がここを訪れたのは観光ではなく、沛及び豊の農業を視察するという仕事上の理由によるものだった。しかし当然ながら私の心は仕事からはるか遠く離れ、南京から沛に向かう車の上でもルートと地図と照らし合わせながら「ここで二二〇〇年前に張良が劉邦と出会ったのね！（留にて）」「ひよっとして韓信がああたりをぶらついてたのかも（淮陰にて）」などと舞い上がりまくり、周囲の人間を不審がらせてしまった。今回は農業事情の視察ということで、見て回る地域は農村。これもまた私にとってはますますラッキーな限りである。

沛は河川や池、沼が多く、水辺には草木が生い茂っていた。いわゆる水郷地形なのだが、しかしそれは一般に私が水郷という言葉から連想する江南の水郷イメージとはまったく異なるものだった。荒涼としていて、茫漠としていて、しかし人々の生活臭が何故か生々しい。同じく水のほとりに広がる村の風景のはずなのに、江北と江南ではこうも違うものかな、と驚いてしまった。

沛は中国における未開放地域ではないが、外国人が来るといふのは非常に珍しい田舎である。ましてや中心部から離れた農村になれば言わずもがな。ここを訪れた我々は「日本人」ということですっかり珍らしがられ、周囲の集落に住む人々が用もないのに我々の顔を覗きに來て、我々の一挙手一投足にどよめいていた。これで金髪

碧眼の欧米人が来た日には大フィーバーが起こるどころではないだろう。昔の外国人慣れしていない時代の日本人と似ていると言えなくもないが、根本的な違いが一つあった。日本人なら、「あ、外人だ」と思っても遠くから眺めるだけに終わり、外人に話しかけられようものなら逃げ散ってしまうが、沛の人々はそうではなかった。

最初こそ遠巻きに眺めていたが、次第にその距離が短くなり、そのうち至近距離から堂々と観察し、話しかけてくる。「どこから来た」「何才だ」等々、一度言葉をかけてしまうと堰を切ったように皆が親しげにちよっかいを出してきた。人の持っているカメラで写真を撮ってくれと言い、重たそうだから持ってやると半ば強引に荷物を奪い取るようにして担いでくれたり、会話の合間に大笑いしながら人の肩をバンバンたたいたり、昼飯を食べに来い、と手を掴んで連れて行くとする。素朴で、人懐こく、物おじせず、ちよっと無遠慮で、でも憎めない人々。短絡的かつ出来過ぎの思い込みだと自覚しながらも、もう私は「この人達は劉邦の子孫」という思いを禁じ得なかった。目を瞑れば、そこを泗上の亭長が子分を引き連れ、大笑いしながら歩いて行く光景が見えるような気がした。

視察が終わって、最後に案内されたのが沛の最大の観光名所「大風歌碑」だった。最近になって作ったと思われる石碑と、その傍らに立つこれまた真新しい劉邦の銅像。ここが果たして史記にある「沛の宮を以て高祖の原廟と為」した、その跡地に当たるのかどうかは結局分からずじまいだったが、私はここで杯をかがげて上機嫌で謳う彼の姿を感じた。作りものの銅像の上にも、古代とは変わってしまったであろう沼沢と草木ゆたかな農村の上にも、人懐こいが少々

遠慮のない村人たちの笑い顔にも、劉邦の姿がだぶって見えた。自身が歌に詠んだごとく、劉邦の魂魄は今までも、そしてこれからもこの地に遊んでいるのではないか、と心から思った。そう、信じたくなった。

この旅において私の頭は漢のことで一杯だったが、劉邦ばかりじゃ不公平、とばかり、最後になって実に意外な形で項羽にも遭遇することになる。偶然立ち寄った宿遷という徐州市にほど近い田舎町において、「項王生誕の地」といういかにも怪しげな陳列館に出会ったのだ。しかし、私の中には彼の最期のくだりから「項羽イコール江南出身」という図式ができあがっていたため、私はこの陳列館を偽物と思い込んでしまった。「ちよっと沛に近いからって、勝手に項羽の生誕地に仕立てあげたのね。なんていいかげんな！」と憤慨し、そこに立つ項羽と虞美人の像に「もっとカッコ良く作ってよー」と文句をたれつつ見学したが、宿舎に帰って史記を読んでみると、いいかげんなのは私の知識であることが判明。項羽は正真正銘下相、つまり現在の宿遷出身なのだ。冷静に考えてみれば、彭城（現在の徐州にあたる）遷都の際、項羽自身も「故郷に錦を飾る」云々ちゃんと言っている訳で、頑なな思い込みというのはなんとも恐ろしい。しかし自分の情けなさを棚にあげて言ってしまうが、項羽はとて黄河流域圏の人間には思えない。ここでは、項羽が皆この地に存在していたというイメージ、沛で感じた劉邦のデジャヴにあたるものの一片たりともつかみ取ることはできなかったのだ。もっとも、最初からここはニセモノと決め付けていた私の思い込みの為せる業かもしれないが。ともかく、宿遷には申し訳無い限りだ

が、私にとっての項羽の江南人イメージは未だに崩れていない。ちなみに宿遷には現在も「項王故里」という地名が残っている。

項羽の自刎の地である烏江は南京からさほど遠くない。私もここには絶対行くつもりだったが、日帰りで大丈夫、いつでも行けるんだと思ってるうちに時間が経ち、結局行かずじまいという実に有りがちなパターンを辿ってしまった。これが私にとって中国留学における最大の心残りである（おおいおおいお前何をしに中国行ったんだ、と一人で突っ込みを入れる私であった）。

戦後五〇周年と「日本鬼子（リーベンゲイズ）」

一九九五年、第二次世界大戦終了から五〇年目。日本語では「戦後五〇周年」といい、中国語では「世界反ファシスト戦争及び抗日戦争勝利五〇周年」という。同じ事実を表現するのにどうしてこうも違わなければならないのか。両国の間に横たわる、深く長い亀裂を思うとき、暗澹とした気持ちになってしまう。

南京は場所が場所だけに、きつと日本に対する敵愾心が無茶苦茶強いところなんだ、町の中でうっかり日本語を喋ると通りすがりの人に殴られてしまうかもしれない、と訪中前心配していたが、実際南京に住んでみるとこれらの危惧は基本的には空振りで、悲壮な覚悟をしてきた私にとっては気抜けしてしまいうくらいだった。先の戦争に対する評価を聞くと、みな「昔の日本軍国主義は中国人民に悪事を沢山働いたけど、普通の日本人民も軍国主義の犠牲者です」という感想を述べてくれた（勿論、日本人へのリップサービスの部分

が大だろうが）。しかし、中国も日本もこれから手に手をとって、未来へ向かって友好的に歩んでいきます、めでたしめでたし……となるには障害があまりにも多く残りすぎている。それは日本側の責任でもあるし、中国側にも問題がある。

南京大虐殺という事件については、私自身詳しく知っていると胸を張って言うことはとてもできないし、アメリカ人のうちヒロシマやナガサキを知らない人が少なくないのと同様に、南京、そしてここで起こった悲劇を知らない日本人が多いということも、情けなくはあるが事実として認めざるを得ないだろう。しかし事実は事実として、今後このままで良いというわけではない。

ある日、授業の合間に先生と生徒数人で雑談していた。話題は第二次大戦終結五〇周年のことから、いつしか南京大虐殺事件に移っていった。皆が熱っぽく討論している最中、ある一人の日本人留学生はこう言ったのだ。「なんきんだいぎやくさつって何?」……その際の中国人先生の顔をなんと表現したらいいのか。世界各国から来ている留学生も、信じられないといった面持ちで私とその発言者を見ていた（日本人は我々二人のみだった）。私はあわててフォロワーを入れながらも、自分がその人と同じ日本人であることが本当に恥ずかしくなった。南京大虐殺だけではなく、かつて日本がアジアで植民地支配を行ったということすら平気で「知らない」と言う人がいるのだ。中国に留学しようという前に中国に関する予備知識をつけてこないというのも信じ難いが、知らないことを恥ずかしいとも申し訳無いとも思わないのだからたまったものではない。正直に言わせてもらえば、こんな人達が中国語を学んでどうなるんだ!

思う。恐怖すら感じてしまう。

悲壮な覚悟をしたわりには南京の対日感情は悪くなかったと前述したが、しかし私が日本人として全く嫌な目に会わなかったわけではない。町中で歩きながら、またバスやタクシーの中などで日本人の友達と日本語でべちゃくちゃ話していると、時々吐き捨てるようにこう言われた。「リーベングイズ」……漢字で書くと「日本鬼子」、テレビドラマ大地の子ですっかり有名になったあの言葉。日本人に対する一種のスラングだし、言っている方はさしたる悪意もないのかもしれないが、実際言われた方はこれは相当クラクラ来る言葉だ。私も最初に言われたときは想像を越えるショックで目眩がした。唾を吐きかけられたり、石を投げられたことはない私はまだ幸運な方だが、それでもあの「日本鬼子」といわれた時の心の痛みは一生忘れられないだろう。

もう一つ、これは南京ではない別の都市の博物館で遭遇した出来事。そこでは「抗日戦争勝利五〇周年記念展」が開催されており、おりしも地元の小学生在が先生に引率されて見学に来ていた。展示内容は日本軍の蛮行および中国人民の勇敢なる戦いぶりを表すパネルが中心だった。先生がどんなふうにな生徒に解説するのか非常に興味があった私は、一般の中国人客のふりをしてその団体の近くで先生の説明を聞いてみた。内容は「聞かなきやよかった」の一語につき。日本鬼子は残酷で殺人狂、悪魔のように卑劣で狡猾い云々……。最初はすいませんと心の中でひたすら謝っていた私だが、そのうち「なにもそこまで言わなくてもいいじゃないか……」とその先生に腹が立ってきた。しかし、一番悲しかったのはその小学生達が「日

本鬼子」という言葉を常用していたことだったかもしれない。

先の不幸な戦争に対する日中両国の意識の違いというのはあまりにも大きすぎる。その溝を埋めるためには、どちらか一国だけが責任を負い努力するのではなく、両国が共に相手に対する理解を深めることが必要だろう。日本にも、中国にも、為すべきことはあるのだから。

おわりに

私が中国を去ってもう半年が過ぎた。一年ではあるが、この間実に色々な所へ行き、沢山のひと会い、様々なものを見た。少数民族の秘境へ行き、民族衣装を着せてもらい、土地の人々とバンブーダンスを踊った。砂漠でラクダに乗り、そのあまりのスピードに振り落とされそうになった。中国人ひしめく列車に乗り込み、赤ん坊の「小」を足に引っかけられて乗客たちに笑われた。ある大学の資料室へ行ったら後漢期の銅鼓があり、叩いていいよといわれて手を震わせつつ触らせてもらった。市場で店の親父とバナナを買う買わないで大喧嘩し、気がついたら周囲に黒山の人だかりができていた……等々。時には、非システマチックな中国社会にほとほと疲れ果て、早く日本に帰りたい、こんな国二度と来るものかと嘆いた時期もあった。しかし、今にして思えば中国の欠点すら懐かしい。あの中で生きていた自分が段々遠い存在になっていくことが悲しくなるほど、中国の全てが愛しくてたまらない。一般に、インドや中国は一度好きになると手が付けられなくなるといわれているが、私も見事にそ

れを実践しつつあるようだ。この留学記の中にも、一部中国に対して辛辣な部分もありますが、何卒各位には私の中国に対する愛情の為せる業としてご理解頂きたい。ともかく、一年間というごく短い期間だけでも中国に住めたということは、私にとってなにもものにも代え難い誇りである。留学の機会を与えてくれた我が母県には、生涯感謝してもきれないと思っている。

私は史学科に入った時点で既に中国古代史を専攻することを決めていた口だが、漢文さえ読めれば十分だと思っていたので、現代中国語を本格的に勉強しようとは考えなかったし、ましてや中国に留学しようなどは夢にも思っていなかった。歴史と語学は全く別物だと思いきや、今回中国に留学する時も、目的はあくまで語学の修得だから暇を見つけて史跡を観光したいな、と思っただにすぎなかった。しかし、中国で暮らし、ことばを学び、人々と交流するにつれ、私の中国史に対する興味や愛情は前よりも一層強まっていった。そして大学で学んだ歴史知識も、ことばを習得する上で私を大いに助けてくれた。もし私が中国の歴史とは無縁の人間で、中国文化や歴史の背景などを全く知らず、興味を持っていなかったとしたら、あんな短期間で中国語を（一応）マスターすることはできなかっただろう。自分の学ぶその地へ行って、その言葉を学び、その地の人々と触れ合うことで、日本で本に齧り付いているだけでは想像もしていなかったものが見えてくる。私は、今回の中国留学を通じて、舞台を見ることの重要性とともに、語学と歴史は決して無縁のものではないと痛感した次第である。

最後に、私に中国留学記を書く機会を与えてくださった窪添先生